

「クレームから相互理解を目指して」

*21世紀型おやじの会の意義再発見 「あえて今 活用しよう おやじの力」
～おやじ東京からの提案と決意～

平成21年4月（概要）

心の通い合う地域づくりに寄与するために

平成15年10月、「緊急提言～子どもを犯罪に巻き込まないための方策～」が東京都に提出されました。その中で、各地で活動が始まっているおやじの会への支援、ネットワーク化、さらに多くの地域や職場で設立を目指すという提案がされており、東京都の呼びかけに応じた都内おやじの会からの有志が結集して「おやじ東京」は、誕生しました。

その設立趣意の中では、「次代を担う子どもたちが伸び伸びと健やかに成長できるよう、社会環境を整えることは、現代に生きる大人の責務である。」「子どもの成長過程において、行動様式を身につけるための鑑として、手本として、リーダーとして、相談相手として、守護者として、父親の果たす役割は非常に大きい。」「わが子のみならず、隣近所や地域の子どものことを考え、かつ行動して、「地域のおやじ」たらんと努めよう。」と掲げ、その後各種活動を展開してきました。

繁華街における子ども達の実態把握、薬物乱用防止、性とHIV、子どもの居場所作り、寝屋川でのいたましい事件を受けての安全対策、インターネットと携帯電話の子どもへの影響、若者の人間力を高める国民会議との連携による取り組み等多岐にわたる課題について、議論と実践を重ね社会に向けた発信をしてきました。

一方、一昨年の秋ごろから、マスコミの報道で理不尽な行動や要求をする大人たちのことが、頻繁に取り上げられるようになりました。具体事例は枚挙に遑がないが、給食費や保育料等を払わない保護者、学校や教師に対する自己本位の要求、病院で医者に対する威嚇、駅員に対して執拗な苦情と暴力行為などが、連日のように伝えられてきました。これらのことは、設立趣意に掲げたことのまさに正反対の現象です。

危機感を感じた私たちは、おやじ東京大会2008（平成20年3月23日）のテーマを、「クレームから相互理解を目指して」として開催し、20年度を通しての研究課題にして取り組んできました。10月には新宿区教育委員会の協力を得て、シンポジウムとワークショップを開催し、より多くの方々からの事例報告や貴重な意見を得ることができました。

ここに一年間の活動の結果として報告し、おやじへ、おやじの会へそして行政への提案となるよう取りまとめました。そして東京都青少年治安対策本部に提出いたしました。この提言が青少年治安対策本部だけでなく、東京都の教育庁においても反映されることを祈念しています。

平成21年4月

おやじ東京会長 脇山 幸之

1 おやじ東京としてなぜ取り組んだのか

私たちが、子どもではなく大人(おやじ)が変だと考え出したときには、学校を取り巻くいわゆるモンスターペアレント対策として、港区では弁護士等法律の専門家を中心とした相談支援組織が設置されたり、京都市ではおやじの会もその一端を担う地域を包含した学校問題解決支援チームが設置されていました。又、私たちの大会後の平成20年6月に、東京都教育委員会は公立学校における学校問題検討委員会を設置しました。また、大会においてご講演いただいた明治大学の諸富教授は、長年窮地に陥った教師の支援活動をされています。

しかし、これらの組織や検討の方向は、いずれも問題が発生したときに、学校や教師、あるいは子ども達の教育環境を守るために機能するものでした。この背景には、「以前は父親が出てくれば、母親よりも社会で活動している面が強く、ビジネス社会での経験から、社会良識に基づいた解決に向かう」と言われていましたが、最近では「父親が出てくると一層火に油の状況が生じる」といったことがおこっているようです。これではおやじたちが問題をより複雑にしている、手を打たないといけないと考えました。つまり、それは、理不尽な要求あるいは問題行動が発生してから取り組むのではなく、心の通い合う日ごろからの良好な関係作りができる活動が求められており、それが、真に、発生抑制をもたらすと考えました。

一方、昨年11月に都知事に提出された、「東京都青少年問題協議会意見具申」には「非社会性」という言葉が(反社会性でない)使われており、それを生み出す現象は、若者だけでなく親世代にも起因していると考えました。

さらに、こうした議論の仕掛けは、学校や教育委員会、教師と保護者が会員である各校 PTA では難しいと判断しました。そこで、地域には目を向けつつも、日常的に特定の地域と関わりを持たない、ネットワーク組織であるおやじ東京の出番だとの思いを強くして、一年間の活動の柱と据えたものです。

2 シンポジウム、話し合いを通して見えてきたもの

おやじ東京大会2008で基調講演をいただいた諸富教授は、親世代を、山口百恵世代、松田聖子世代、浜崎あゆみ世代と、時代を代表するアイドルに擬えて分類し、その特徴を述べられました。私たちはもう少し時代を遡り、1960年代から2000年代を10年刻みで振り返り、その時代背景を基に教師像に対する保護者の認識等の推移を考えてみました(当然ながらすべての人々がそうであるというのではなくあくまで象徴です)。

I 時代背景の変遷

- 60年代 親も子も、先生は偉い人という意識。
- 70年代 この時代に育った親世代は、校内暴力のような問題が起こった当時の中学校に通ったり、見聞きして育った。→親になったときに、先生の翻弄される姿を見ていたので、それほど敬意を持っていない。(80年代に続く)
- 80年代 先生より高学歴な親が増えてきた。→子どもに、親が先生よりえらいとの誤った認

識が芽生える。

90年代 好景気時に共通するが、この時代の学生は、教師の人气が低かったバブル時代に社会に出た人が多い。その後はバブル景気が崩壊し、就職氷河期に入り苦労している若者が多い。→教職をたいしたことのない仕事あるいは公務員バッシングの思いをもっている。

年収が先生をはるかに超える人もでてきた→俺のほうが偉いとの大いなる勘違い(拝金主義的傾向が後年も続く)。

就職がままならず、社会に対するやるせなさを持つ若者の出現。

00年代 リストラが吹き荒れ、社会的地位を喪失した人が発生→公務員である教師に対する言われなき妬みを持つ者もいる。

アメリカ的の権利意識がまかり通り、言ったもの勝ちの風潮。

→学校でも同じように振舞う例がある。

米同時多発テロ以降の傾向

学校内だけでなく、衝撃的な事件が続き、社会の反応が鈍くなっている、暴力を否定する社会の力が弱くなっている。どんな理由があろうとも暴力は許されないのは当然なのに、保護者・市民も政治・行政・学校も、毅然として対決する心構えが大切なのにできていない面が見れる。→自分に関係がない、自分に影響ないので良いという風潮が目につく。「自分さえ良ければ病」の蔓延。

◎ 30代後半から50代の会員が多いおやじ東京での話し合いでは、

①60～80年代は子どもや学生だった時代の視点 ②90年代～最近は大人の視点からの議論になりました。ここに記載した学校や教師に対する意識の変遷とともに、人々の社会との関わりについても大きな変化が生じているとの指摘も出ました。特に、学校ではモンスターペアレンツと称され、病院ではモンスターペイシエント、商店や駅員に対してはモンスタークレマーとなるように、世はまさに「クレマー社会」という状況にあると認識しました。

II クレーム社会の要因

① 過剰な消費者意識(保護者)の増長

- ・ 教育もサービスとの意識、同一対価には同一サービス(待遇)の意識が強い。そうしたことから、担任教師に対して、当たり外れの評価(新米教師、退職前の意欲なし教師、男性教師、女性教師などについてのレッテル貼り)をする。
- ・ 自分本位の立場の使い分け。対等な立場の消費者としての要求、不利な決定(判断)には、子どもは半人前・親は教師と違いプロではないと、保護を主張する。
- ・ 集団の脅威。一人の発言は弱く小さくても、複数が集まり集団になると、些細な事柄からエスカレートして暴走。(モンスターはファミレスで生まれる。諸富教授)→従来からの日本人特有の傾向がエスカレートしている。

② 教師の変質が見られないか

- ・ 客観的に見て頼りない教師も実在する。(大量採用時代・でもしか先生)
- ・ 自己防衛ばかりの管理職教師。教師は独立した存在(裁判官じゃないのに)と、とりわけ若い教師を追い詰めてしまう(自殺と言う最悪な結果も発生している)。
- ・ クレーマーに安易に迎合し、仲間教師の落ち度と認める教師すらいる。
- ・ 割合は少ないが、各学校に思い当たる節がないではない。

③ 地域社会も変質したという数多くの報告

- ・ べたべたした近隣関係を疎んじる意識が蔓延し、地域の間人関係が希薄化しているのではないかと数多くの報告がある(昨年12月に提出された、東京都生涯学習審議会の答申にも、こういう地域社会の変化が指摘されている)。
- ・ そのためかつては地域社会が緩衝材となっていたが、クレームが直接学校等に向けられることが多い。
- ・ 隣(ほかの子)は関係ない。うち(の子)さえ良ければという親の意識。ここにも「自分さえ良ければ病」。もともと自分のことは自分で守れという報告も多数ありすぎることも事実。

④ 情報過多の弊害と選択力の不足

- ・ マスコミは話題になることを、集中的に繰り返して報道する傾向にある。日本人のメディアリテラシーの欠如。インターネットの普及により、正誤入り混じる情報が氾濫している。そしてそれを受ける側に情報選択の力が育っていない。

III 「理不尽な要求」の5つのタイプ(尾木教授)

① 学校依存型

- ・ 親は出勤、朝は教師が子どもを起こして。
- ・ 柔道着は洗にくい。皆が汚すのだから学校でまとめて洗濯して当然。

② 自己中心型

- ・ うちの子を劇の主役にしろ。(白雪姫だらけの学芸会)
- ・ 大事な仕事がある。学校行事の日程を変えろ。

③ ノーモラル型

- ・ 夜中や休日、授業中でも教師に電話をかけまくり、クレームを繰り返す。携帯電話の便利さを悪用している。

④ 権利主張型

- ・ 風邪で学校を休んだ。食べてないのだから給食費を返却せよ。
- ・ 税金を払っているのだから義務教育は無償だ。給食費・教材費は払わない。

⑤ ネグレクト型

- ・ 食事の準備をしない。髪や服装も乱れたまま。

論議を進める中で、ネグレクト型は専門機関(児童相談所等)に委ねるべきである、早期に解決しないと、子どもの健康、最悪の場合は命に関わる。だから、早期発見・早期連絡のできる仕組みの確立が必要だという結論になりました。

上記の①～④の4タイプは、いずれも未然防止ができる可能性があります。地域での日ごろからの心の交流が盛んで、保護者の意識が変わり、じっくり話し合える「心のゆとり」を持つことが大切である。子どもはひとりっきりでも、家庭だけでも育たない。地域の中での育ち成長するものです。

子どもの成長や教育は「効率だけがスケールではない」という、こうした地域社会の共通認識が醸成される活動を見出すことが解決になるとの思いに至りました。(前掲の生涯学習審議会答申では、「地域の教育力」「世間知」ととらえた議論がされている)。

3 おやじ東京からの提言

I) おやじたちへ

おやじの会の結成に至らなくても、できることはあります。

○ コンサルタントになろう

自分の子ども、家庭内だけでなく、地域の相談役になろう。皆から相談されるおやじになろう。メンター(一般的には指導者・助言者だが、少し構えて言えば「世間知」の伝道者)として、生き方(生きる技術)を伝えよう。

○ プロデューサーになろう(おやじの会を作ろう)

地域の事業企画をして、ビジネス経験を生かしマネージャー(世話人)になろう。

○ クリエーターになろう

地域社会の構築者になろう。社会性がないと周囲の人々に認められない。それを身をもって示そう。

○ ディレクターになろう

家庭も学校も地域社会もルールが必要。物事をきちんと整理して、模範となる姿を示し舵取りをしよう。

II) おやじの会へ

○ おやじ東京の設立時のアピールをもう一度伝えます。原点に戻ろう。

アピール

父親よ、子どものつぶやきに耳を傾けよう。

子どものいる学校へ出かけよう。

子どもが育つ地域へ、もっと足を運ぼう。

不器用でも、口べたでも、子どもに思いを伝えよう。

そして、子どもとともに楽しもう。

やれることはたくさんある。

家庭だけでなく地域の「おやじ」になろう。

地域の「おやじ」たちと手をつなごう。

おやじ、出番だ！

○ おやじの会の活動を地域に広げよう(隣人祭りをお手本に)

隣人祭り:パリで 1999 年から始められた、近隣の住民が食べ物をもち寄って語り合うイベント。最初は、パリのアパートで高齢者が孤独に死亡したが、1 か月後に発見された。これにショックを受けた住民たちが、日ごろから住民同士に付き合いがあれば悲劇は起こらなかったはずと考えて、NPO 活動などを通じて近所同士でのパーティ開催をよびかけ、それから行われるようになった。行き過ぎた個人主義に対する反省から、近所での人びととの話し合いも必要ということから、この動きはすぐヨーロッパ全域に広がった。日本にも伝わり、2008 年 5 月には東京、神戸などで開かれた。マンションの中でも隣人祭りをきっかけにことばを交わす人が増え、助け合う事例も増加している。(Yahoo 辞書より)

4 おやじ東京の決意

I おやじ東京 2009 年度活動方針

- ① 都内おやじの会のネットワークを強化します。
- ② 仕事について若者と対話し、職場体験を応援します。
- ③ 安全安心まちづくりに貢献します。
- ④ 家庭のあり方を考え、主体的に関わります。

II おやじ東京の活動のバックボーン

- ① 理不尽な要求が発生しないような環境を作っていきます。
- ② 自らは絶対にクレーマーにはなりません。
- ③ 常に、自分達の生活を見直し点検します。
- ④ 心の交流の世紀を作っていきます。
- ⑤ 会員各自は仕事でも個人生活でも、現在の社会を形成しているという自覚を持ち生活するように努めます。

以上、おやじ東京、2008-2009 年度活動報告書から抜粋しました。

2009 年 9 月